

『聖書』と『古事記』の創世神話

松本 敬子

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Story of Creation in the Bible and the *Kojiki*

MATSUMOTO Keiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

It appears that the worldviews evident in Shinto, a faith particular to the Japanese race, and the worldviews apparent in the Bible, have not been subjects of comparison in the past. I subsequently attempted to analyze their respective stories of Creation, concentrating on the Creation from the Book of Genesis. I found that the 7 days of Creation and the gods of Creation appearing in the *Kojiki* may correspond to one another. It also became apparent to me that through a comparison of worldviews concerning Creation evident in the Bible and the *Kojiki*, one could in fact see very intriguing similarities in each of their concepts of divinity.

プロローグ

日本人固有の信仰という、おそらく神道をあげることができると思うが、神道の世界観は日本人の生活や考え方に深い影響を及ぼしているにもかかわらず、その全体像はなかなか捉えにくいというのが、おそらく一般的な理解であろうと思われる。神道信仰の状況は錯綜しており、また考え方も多様である。神道とは何か、という単純な問いに簡単に答えることができないであるということも、事実であろう。

一方、『聖書』はユダヤ教徒だけでなく、キリスト教徒やイスラム教徒にとっても聖典とされ、世界宗教の基盤となっているといえる。世界で最も読まれてきた書物であり、ゆえに聖書の世界観は、文字通りグローバルな世界観ということもできると思われる。

さて、現代はグローバル社会といわれて久しく、日本もまたその一員であることは、一般にも認知されていることと思われるが、日本固有の神道の世界観と世界宗教である『聖書』の世界観とが、相互に熟知されあっているとはいいがたい状況であるように思われる。また、両世界観の比較ということも、十分になされてきていなかったようにも見える。

このような状況から、日本人の固有の信仰である神道の世界観と、世界宗教を擁立した『聖書』の世界観を比較研究してみることは、決して無益なことではないと考えられる。

本論文の目的は、キリスト教と神道それぞれの創世神話における世界の成り立ちについて、『旧約聖書』の「創世記」と『古事記』の「天地初発」（あめつちはじめてあらわれし）¹の記述内容を比較し、両者の類似性を明らかにすることにある。

1 「創世記」と『古事記』の天地の始まり

「創世記」第1章と第2章に見られる創世物語には、神の唯一性と超越性、自然と神との明確な区別、万物の創造、人間の位の高さと卑小さ、万物は本質的によいものであるということが示されている²。

神は天と地をつくられた。それが始まりであった。地はととのわず、むなしく、やみが底知れぬふちを覆い、水の上に、神の息吹が舞っていた。（創世の書 1・1-2）³

万物の始めに、神がいた。何もないところに、ただ

神だけがすでに存在していたのである。ここで述べられている「神」はヘブライ語で「エロヒム」、複数形である。単数形は「エル」、これはセム語に共通のもので、権力と権威を指し、すなわち、勢力と偉大さに満ち溢れたものを呼ぶもののようである⁴。第1章では、常にこの複数形で語られている。「エロヒム」の前に、動詞「つくる」の「バーラー」がくるが、これは3人称・単数・男性形である。この動詞は、「一方では完全なまでの労力の欠如を表し、他方では、どこにおいても決して素材についての記述と結びついておらず、それゆえ『無からの創造』の思想を含み、「神が世界の主だということ」を示しているという⁵。

次に天と地であるが、天とはユダヤ系初代キリスト教会では「目に見えない世界」と解釈され、「目に見える世界」を地として、その二つの世界を神が創造したのだと考えられていた⁶。アウグスティヌスは、これを「物体なるもののうち最高のものであるこの天の、いわばそのまた天」⁷であるとしている。神や天使の住まう天上世界が、最初に創造されたということなのだろうか。『七十人訳ギリシア語聖書』によると、この「世界」は「コスモス」と訳されている。しかし、ギリシア人の「コスモス」という言葉は「これから作り上げられる宇宙」という意味にとった方がよいということから、神がこれから行う働きをあらかじめ約束したという解釈もされている⁸。神は、その「意思の自由に基つき、創造者として、『天と地』——すなわち端的に万有——に対し、それらがその後存続していくあり方の端緒を定めた」⁹ということなのであろう。そして、「それが始まりであった」の「始まり」は時の始まりを意味し、「それ以前には、宇宙の存在より前にあった神の存在以外には、何も存在していなかった」¹⁰とされている。つまり、宇宙の創造の始めにはただ神のみが存在し、その意思が万物を（時間さえも）創ったという事が語られていると考えられる。

「地はととのわず、むなしく」の「トーフー ワボーフー」は「何も無いところ、空白なところ」を意味するが、「闇の立ちこめた原始の海」というイメージを持ち、同時に「三次元的なひろがりへの連想をも媒介する」¹¹。その上に、「神の息吹が舞ってい

た」。「神の息吹」「ルアハ エロヒム」は、「神の嵐」「すなわち恐るべき暴風と訳したほうがよい」¹²という説もある。「神の山」「神の土地」などという表現には、単純に最高度のものを意味するところがあるからである¹³。「舞う」もまた、鳥が大きな翼を広げて舞い降りるさまを表現する言葉である。つまり、「神の息吹」は「神の嵐」となって、鳥の羽ばたきのように、このむなしく混沌とした「底知れぬふち」をかき乱し、かき回したものと考えられる。

続く第3節では、光の創造が述べられている。

神が「光あれ」と仰せられた。すると光ができた。神は光をよしと思われ、光とやみを分けられた。神は光を昼と呼び、やみを夜と呼ばれた。こうして、夕べとなり、朝となった。これが一日めである。（創世の書1・3-5）

ここで神は、自らの言葉のみで光を創造している。ちなみに「ヨハネによる福音書」第1章1-5において、ヨハネはみことば（ロゴス）の永遠性を主張し、それを、時が始まるより先に、父なる神と同様の神性を有しながら、異なる位格を持つものとして存在していた、三位一体の第二の位格であるとしている¹⁴。ロゴスとは、父なる神の内的、本質的言葉であり、神のみことばはその意志の表現であるという¹⁵。

ところで、ここで創造されている光が何かということは長く議論されてきた。太陽と月と思われる光は、4日目に創造されているからである。そこで、光の名で霊的被造物（天使か）が形成されたという解釈もされているが¹⁶、ここでは他の神話と違い、光は神格化されず、神によって創造されたものに過ぎないとされていることを確認しておくことにする。そして、この光と闇の分離によって、時間と秩序が与えられたものとしていると考えられる。

一方、神道、日本神話において、世界はどのように始まったと考えられているのだろうか。

天地初めて發れし〔之〕時に、〔於〕高天の原に成れる神の名は、天の〔之〕御中主の神。〈高の

下の天を訓みて阿麻と云ふ。下は此れに效ふ。〉
次に高御産巢日の神。次に神御産巢日の神。此の三柱の神は〔者〕、並に獨神と成り坐して〔而〕、身を隠しき〔也〕。(1 天地初発 43-45)¹⁷

『古事記』と『日本書紀』とでは世界の創世をめぐって相違が見られるが、『古事記』の書き出しについては、中国の古書の影響を受けたといわれている『日本書紀』と同様の宇宙観を示している¹⁸。古代日本人は古代中国人と同様、「存在世界のはじめに絶対無の世界を発想せず、存在世界は所与・既存のものだと認識している」¹⁹ようである。「創世記」とは異なり、神が「存在世界一切を材料なしに創り出したというのではなく、存在が先行してその存在から神が顕現したと発想している」²⁰というのである。また、存在世界の生成の開始や発展には、「存在そのものの意志によるものとの発想があった、ともいうことができる」とし、「たんなる変転ではなく、目的を持った生成への営み」であり、神道の自然、「おのずから」な世界観をみることができる²¹。

世界の生成に従事する神々は「命」とも呼ばれ、「みこと」は「御言」に通じる。それはロゴスである。神道、特に古神道では、言霊信仰というものがある。

「ことばが『あめつちをうごか』すものという考え方が伝統」的にあるのである²²。本居宣長は「豊雲野ノ神より訶志古泥ノ神まで九柱の御名は、国土（くに）の初と神の初との形状（ありさま）を、次第（つぎつぎ）に配り当て負せ奉りしものなり」²³としているようだが、西郷信綱氏も「気づいた人がまだあまりいないようだが、(中略)古事記が神々の名を列挙するさいには、一種の遊びの要素、言葉のもじりや諧謔のはたらいている場合が多い」²⁴と指摘している。そこで、神々の名を宇宙生成の展開や本質を示す、一種の象徴として考えてみたいと思う。

「天地初めて發れし〔之〕時に」の「發」の読みとしては、研究者の間でも諸説あるが、ここでは山口佳紀氏の「あらわる」という読みを受け入れたい²⁵。天地開闢の時、すなわち「天地初めてあらわれし時に」高天の原という「神の住まう天上世界」が存在していた。そこに「成れる」神は、アメノミナカヌシの神。文字通り、天の中心であり、主「アドナイ」

として存在する神であると考えることができよう。この神は造化三神とされていながら、事跡の記述がなく、中国思想の影響を受けた観念的な神と考えられ、また、平田篤胤が北斗七星の主宰神と見たことから、宇宙の中心の「アドナイ」としての神観念がうかがえるのではないだろうか²⁶。

次にタカミムスヒの神だが、こちらは同じ造化三神でも、身を隠して後もアマテラスとともに高天の原で中心的な役割を果たしている²⁷。次のカミムスヒの神も造化三神として「獨神」で出現後、身を隠す。ここでは個々の事跡よりも、神名にある「ムスヒ」について注目したいと思う。

「ムスヒ」とは、「天地・万物を生成発展させる霊的なはたらきをいう。ムスは生成発展する意。ヒは霊または神秘的なはたらきを意味する」²⁸。「ムスヒの神は、衰えようとする魂を奮い立たせるはたらきをもつという信仰」があり、「神々の生成をはじめ、万物の生成発展にかかわる神道では重要な概念」であることがうかがえる²⁹。すると、天と地が創られた時、そこには天の中心たる神が存在し、万物生成の根源の力がすでに存在していたと考えることも可能である。そして、その神は三柱の「獨神」で、「身を隠し」たのである。

次に國稚く浮ける脂の如くして〔而〕、久羅下那州多陁用弊流〔之〕時に、〈流の字より〔以〕上の十字は音を以ゐる。〉葦牙の如く萌え騰がれる〔之〕物に因りて〔而〕成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲の神。〈此の神の名は音を以ゐる。〉次に天の〔之〕常立の神。〈常を訓みて登許と云ふ。立を訓みて多知と云ふ。〉此の二柱の神も亦並に獨神と成り坐して、身を隠しき〔也〕。上の件の五柱の神は〔者〕、別天つ神ぞ。(1 天地初発 45-47)

この「國稚く」の「國」とは、天上世界「高天の原」に対して、地上世界としての「國」大地ととるべきであろう。本居宣長は、「天になるべきものと地に成るべきものとがいまだ分かれざる状態」³⁰としていうというのが、最初にその「天地初めて發れし〔之〕時」としていることを考慮すれば、天と地は明確に

分かれて誕生したと考えてもよいと思われる。そのあたりは、「創世記」冒頭で「神は天と地をつくられた」と明確に天地を分けているのに似ている。

さて、大地である「國」が出来たばかりの時、「浮ける脂の如くして〔而〕、久羅下那州多陀用弊流」状態であるという表現は、「創世記」の「地はととのわず、むなしく、やみが底知れぬふちを覆い」という状態を彷彿とさせる。そこに「葦牙の如く萌え騰がれる〔之〕物に因りて」ウマシアシカビヒコヂの神が登場する。金井清一氏によれば、「葦の芽の神ではなくて、葦の芽のように生き生きとした生命力である神」で「生命のはたらきという抽象的なものを具体的に表した」³¹ものであるという。先の二柱のムスヒの生成・発展の力をうけての「葦の芽のように生き生きとした生命力」と考えることもできよう。倉野憲司氏も『『国』の生長力を具象的な葦の芽に託して神格化したもの』³²と解釈しているようだが、「國稚く浮ける脂の如くして〔而〕、久羅下那州多陀用弊流」地上世界に、葦の芽のような生き生きとした神の息吹が「萌え騰が」ったと考えられる。

言霊信仰では、同じ音は同音異義の言葉に通じると言われている。和歌の掛詞のようなものと考えるべきだろうか。そうすると、「葦牙の如く萌え騰がれる」の「萌え騰が」るは、「燃え上がる」に通じ、輝く光を連想させる。生命の息吹は、輝く光に通じる。太陽の光が生命に必要な不可欠であることから、光は生命や生命力に結びついていると考えることは妥当であると思われる。

次に「別天つ神」の5柱目、アメノトコタチの神をみてみよう。訓注にわざわざ「常」をトコと読むように但し書きされているところから、大野晋氏や金井清一氏などはトコとは「床」のこととし、土台と解釈しているようである³³。神野志隆光氏はさらに、「アメとクニとに関わる土台の出現なのであるが、いずれも『高天原』に属するもので、アメノトコタチのトコは、ムスヒ（産霊）のエネルギーの展開が具体化される場」であると論じている³⁴。さらに山口佳紀氏は、上代において床には「男女同衾の場」や『日本書紀』に見える「真床追衾」などから「嬰兒誕生」のイメージをもつとし、生殖・誕生のイメージが見られるとしている³⁵。いずれにしても、「天地

初めて發れし〔之〕時」、そこに神が存在し、ムスヒのエネルギーに満ち満ちていて、ギリシア人の「コスモス」という言葉が意味するように、「これから創り上げられる宇宙」の生成発展が約束されていたと考えることも可能ではないかと思われる。

以上、確かに「創世記」と『古事記』の宇宙の始まりには相違が見られる。すなわち、神道では、「創世記」の神のように「存在一切を材料なしに創り出したというのではなく、存在が先行してその存在から神が顕現したと発想している」³⁶ようにみえる。しかし、それは「無」というものについての観念の違いに起因していると考えられる。西洋的思想では、「無」とは文字通り何も存在しない虚無というイメージがあるように思われる。一方、東洋的な「無」とは、西田幾多郎氏によるならば、存在しないという意味ではなく、「絶対に対象化されえないという意味」に過ぎず、「対象化されないもの、形象化されないものはすなわち存在しないもの（非存在）であるというわけではけっしてなく、むしろ「かような存在こそ真の意味での実在」であるという³⁷。「別天つ神」がすべて「身を隠し」たということは、このような無の観念が理解の手がかりになるかもしれない。つまり、無の観念の違いにより、宇宙の始まりの前に神以外何も存在しないと考えるか、それとも、形象化されてはいないものの、その始まりからすでに何らかの存在があったと考えるか、という違いが生じたと考えられるのである。

いずれにせよ、天地創造時、それ以前にどうあったとしても、『聖書』の世界も神道の世界も、まず「神」が登場している。他の古代神話とは違い、「神」が始めから創世にかかわっている。一方は言葉「ロゴス」により宇宙を生成し、一方は「神の名」、それ自体という「ロゴス」によって宇宙を生成（ムスヒ）したと考えることは可能である。ここには、「ヨハネによる福音書」にみられる、「みことばは神であった」という神観念が見られるといってもよいだろう。

2 水の分割と大地の誕生

さて、「創世記」では、3日目に水を分けている。

また神が、「水の間に屋根ができて、水と水とを分けよ」と仰せられた。そして、そのようになった。神は屋根をつくり、屋根の上にある水と、屋根の下にある水とを分け、この屋根を天と呼ばれた。(神はそれをよしと思われた。) こうして夕べとなり、また朝となった。これが二日目である。(創世の書 1・6-8)

この屋根は、ヘブライ語で「ラキハ」、ギリシア語で「ステレオマ」、ラテン語では「フィルマメントウム」と訳され、「かたくて、まるいもの」という意味が含まれている³⁸。ギリシア語のステレオマに「固いもの、固形のもの」という意味があるからであろう。ヘブライ語のラキハには、「空間、広がり」という意味もあるので、「大空」と訳されている聖書もある。ここには、「詩篇」第 104 篇 2 節や、「イザヤ書」40 章 22 節に見られるような、古代ヘブライの宇宙観をみることができるように思える。いずれにしても、『聖書』の世界観では、水は天の上と下で二分され、確かにその一方は天空の彼方に存在しているという思想が見られる。このラキハと天上の水は、後のノアの洪水への伏線のようにも思える。古代ヘブライ人は、天にも地同様、形は違え水が存在していることを知っていたと考えざるを得ない。

それから神は、「天の下の水は一所に集まり、大陸が現れよ」と仰せられた。そして、そのようになった。(天の下にあった水は一所に集まり、大陸が現れた。) 神は大陸を地と呼び、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見てよしと思われた。また神は仰せられた、「青草と、種をつくる草と、その種類によって、それぞれの種をなかにもつ実を結ぶ果樹が、大地に生えよ」と。そして、そのようになった。大地には、青草と、それぞれに種をもつさまざまな草と、それぞれの種をなかにもつ実を結ぶさまざまな果樹が生じた。神はそれをよしと思われた。こうして、夕べとなり、朝となった。これが三日目である。(創世の書 1・9-13)

「トーフー ワボーフー」であるカオス的な地に、

秩序「コスモス」が与えられたと考えられる。この時点までの水と地は分かちがたく湿っていて、「ととのわず、むなしく、やみが底知れぬふちを覆」っていた。2 日目までの闇と光、天の上と下の水と同様、大地と海とに二分されている。神は、世界を二分することで秩序を与えていることに気付かされる。ここでやっと、生物が誕生しうる乾いた堅固な大地が誕生したのである。この大地は生命誕生の土台であり、またこの後の生物の創造により生成・生殖の場となるのである。こうして、神によって創造された植物は、乾いた大地という土台に繁茂するのである。

一方、『古事記』ではどうであろうか。

次に成れる神の名は、国の〔之〕常立の神。〈常・立を訓むことも亦上のごとし。〉次に豊雲〈上〉野の神。此の二柱の神も亦獨神と成り坐して〔而〕、身を隠しき〔也〕。次になれる神の名は、宇比地迺〈上〉の神。次に妹須比智迺〈去〉の神。〈此の二はしらの神の名は音を以る。〉(1 天地初発 48-51)

次の神の名は、クニノトコタチの神。「その名義は国土の土台が出現したことを表わすものと思われ、もともと観念的な存在で具体的造形や事蹟を伴わない」とされ、『日本書紀』では「天地がわかれてのち、混沌のなかから現れた最初の神」とされている³⁹。先のアメノトコタチ同様、このトコにはただの土台という意味だけではなく、生殖の場、ムスヒの場としての大地の意が考えられる。

次のトヨクモヌの神は、小松英雄氏による上古アクセント研究によると、その名称構成は「豊＝雲野神」で、その名の中核は雲であると考えられる⁴⁰。この二柱の神の出現は、大地と水（水蒸気）の分割と生成を表していると考えてもよいだろう。上田賢治氏は、この国土生成の部分について、「初めは雲に覆われて居た現実存在世界が、初々しく水を含んだ土から、乾いた土へと変化し、其処に杭が打たれ、大地としての姿を露にし、整えられ、人その他の存在が生息すべき土台を築き上げ」たものとしている⁴¹。この部分は、「創世記」の 2 日目と 3 日目に似ている。

神は水を天と地 2 つに分け、天の下の水を一ヶ所に集めて大地を創った。それまでの大地は水と一体で、「ととのわず、むなしく、やみが底知れぬふちを覆っていたのである。

そして、「創世記」の水の分割の記述とは前後が逆になるが、『古事記』でも水は天上にも分かれていったと解釈できる。すなわち、トヨクモヌ、天上の水である雲の存在である。天をアメ・アマと呼び、そこから降る水を雨と呼び、地上に集まった水、すなわち海をアマとよんできた古代日本人もまた、古代ヘブライ人同様、天上の水の存在を知っていたと考えざるを得ない。それを、神の「賜り物と感得していた事実を否定することはできないであろう」⁴²。

そう考えると、ここまでの神々が一様に「獨神」で「身を隠しき」とあることにも納得がいく。混沌とした大地や水、生成の力に性別や人格はない。あるのは大いなる生成の力、旺盛な生命力である。この目に見えない生命力こそが、実在を生むのである。そして、この生命力、このムスヒの力を古代日本人は敬意と畏怖を持って、「神」と呼んだのではないだろうか。上田氏も「その世界をその世界たらしめている本質、それを働き＝霊体として感得し、『カミ』の名で呼んでいるのである」としている⁴³。このように考えると、創世における日本神話に登場する神々は、他の古代神話と比較して、人格神的要素が見られないといってもよいのではないだろうか。それは「創世記」において、極力神以外のものを人格神的に扱わないようにしていることに似ている。ヘブライに先行するシュメール文明やエジプト文明には、多数の人格神が存在するが、「創世記」にはそのような人格を持った神々は存在しない。一方、確かに神道は多神教だが、この創世の神々に関しては、人格神と捉えるより、起こった出来事や生成の過程を神名という形で表現したにすぎないと考えすることは可能である。人格神であるならば、当然性別や個性があってしかるべきだが、これら『古事記』の神々は、「獨神」で「身を隠しき」とされ、存在自体も「観念的」とされることで実在を否定されてさえないような感がある。神の名前さえも、象徴やシンボルなのではないだろうかと考えさせられるからである。古代から神道には明確な教義や経典がないことも、

このように目に見えないものを目に見えないままで受容し、その存在を確かに信じるという心意構造によるのかもしれない。これは、キリストの次の言葉を思い起こさせる。

「あなたは私を見たから信じたが、私を見ずに信じる人は幸いである」(ヨハネによる福音書 20・29)

さて、次に登場する神々からは 2 柱で 1 組の夫婦神となる。ウイジニとスイジニである。『日本書紀』本段・第三段・第一「一書曰」にこの 2 柱の神名が「渥土煮尊。沙土煮尊」と記されていることから、前者は泥土の神、後者は砂の神ではないかと推測されている⁴⁴。「天地が泥や砂の混じった混沌とした状態を表しているものという説が有力である」⁴⁵が、ここは先程のクニノトコタチという大地の土台が、水と混じった混沌とした泥土から、砂のように完全に乾いた大地として生成した様子を表していると考えたい。この大地は、先程までの混沌として水と分かちがたい、単なる水中から浮かび上がった土台ではない。それは、この神々が性別をもった一対の存在として記されていることから推測される。先にトコには「生殖・誕生のイメージ」があるという説を述べた。ここで生成された大地はクニノトコタチのトコ「床」に同衾する大地なのである。多くの生命が産み出され、育まれるべき肥沃な大地なのである。単に国土となるべき大地が生成されたことを述べただけならば、何度も書き記す必要はない。男女一対の大地の神がトコに同衾したからには、その国土がやがて豊かな自然に恵まれるということは想像に難くない。「獨神」から夫婦神になったことには、このようなムスヒの力の発現、あるいは実行を意味していると考えすることは可能である。そう考えると、これは「創世記」の三日目の植物の生成、繁茂に対応するという解釈も成り立ちうるだろう。

3 天の門と動くもの

また、神は仰せられた、「天の屋根に大きな明かりがとまり、昼と夜とを分け、季節と日と年の

しるしとなり、天の屋根でかがやき、地を照らせ」と。そして、そのようになった。神は大きな二つの明かりをつくられた。大きいほうには昼をつかさどらせ、小さいほうには夜をつかさどられるためであった。また、星もつくられた。神はそれを天の屋根に置いて地を照らせ、昼と夜とをつかさどらせて、光とやみとを区別せられた。神はそれをよしと思われた。こうして夕べとなり、朝となった。これが四日目である。(創世の書 1・14-19)

明かり「マオール」は、光源、灯を指し、聖書ではおおむね灯の道具からの「明かり」の意味に用いられている⁴⁶。「二つの明かり」は、太陽と月という解釈が一般的である。しかし、すでに昼と夜とは形成されている。太陽と月とは無関係に、それ以前の世界には昼と夜が存在していたことになる。ここで考えられることは、「季節と日と年のしるしとなり」ということから、あまたの星々とともに、いつとは知れない漠然とした「時」から、世界がより細かな時間を刻み始めたことを意味しているのかもしれないということである。

また、ここでも『聖書』は天地の間に屋根「ラキハ」という、天地を分かつ門のようなものを明確に示している。2日目に水を分けたように、ここでもラキハの上に大小の光と星を置いている。このラキハを門のようなものとも考えられるのは、「創世記」7章 11 節の有名なノアの洪水の場面で、「大深淵のあらゆる水源が破れ、天の水門が開いた」⁴⁷の「天の水門」と同じものだと考えられるからである。この「水門」から放たれた水とは、2日目に天地 2 つに分けた天上の水のことと考えられる。

神は、「水にはあまたの泳ぐ生物が生まれいで、地には天の屋根の下を飛びかうあまたの生物が現れいでよ」と仰せられた。そして、そのようになった。神は、巨大な海の怪物と、それぞれの種類によって水の中ではねまわり群がるすべての生物をつくり、またそれぞれの種類によって翼あるすべての鳥をつくりだされた。神はそれをながめてよしと思われた。神はそれらを祝

福し、「生めよ、ふえよ、海の水を満たせ。飛ぶものは地上にふえよ」と仰せられた。こうして、夕べとなり朝となった。これが五日目である。(創世の書 1・20-23)

また神が、「地にはさまざまな種類の生き物が生まれいで、さまざまな種類の家畜と、地にはうもの、野の獣とが生まれいでよ」と仰せられた。そして、そのようになった。神は、さまざまな種類の野の獣と、家畜と、地にはうものをつくり、これをながめて、よしと思われた。(創世の書 1・24-25)

ここで「水にはあまたの泳ぐ生物」と訳されている「ハマイム シェレツ ネフェシュ ハヤー」は、両生類や水生生物で地を這うもの、繁殖するもの、または走るものという意味である⁴⁸。ここではじめて神は生きている魂を創造している。「ネフェシュ ハヤー」は動物の生命で、植物にはない。日本語の魂よりも広い意味を持つ言葉である⁴⁹。また、ヘブライ語原文では 4 日目までの「そして神は言った」「ヴァヨメル エロヒム」ではなく、「そして神は創造した」「ヴァイヴラー エロヒム」となっており、言葉「ロゴス」のみではなく神自ら創造していることが分かる。生物の魂とは自然発生的に存在するのではなく、天地同様に神自ら混沌の中より創造された、貴重なものであることが示されているように思える。

対して、『古事記』は 2 組の神々の名を記す。

次に角杵の神。次に妹活杵の神。〈二柱。〉次に意富斗能地の神。次に妹大斗乃弁の神。〈此の二はしらの神の名も亦音を以る。〉(1 天地初発 51-53)

この 2 神を文字通り大地への「杵の打ち込み」とする見方もあるようであり⁵⁰、大地の固定という意味合いも読み取れると思うが、他の見方も重要な示唆を与えてくれる。ツヌクイのツヌとは「物のなりはじめの意」とされ、この神は「神の形の生り初めを意味」しているとされている⁵¹。また、イクグイの

イクは「生き、動くの意」でクイは「物の芽生えを意味するとされ、物の生き動きはじめることを司る神」と考えられ、両方で「生成繁殖を司る神」と考えられている⁵²。これもまた、ムスヒの土台たる大地の床に蒔かれたムスヒの種、生命力により生成した生物、特にイクやツヌから連想できるように、動くもの、動物の発生を表しているのではないかと考えられる。植物としての生命だけでなく、動物としての生命も発生し、生き生きと大地の床を動き回り、繁殖していった様子が想像できる。それは、「生めよ、ふえよ、海の水を満たせ。飛ぶものは地上にふえよ」（創世の書 1・22）という神の祝福に似ている。

次にオオトノジとオオトノベであるが、「大地の神格化、門で守る神、居所の完成の象徴など諸説」あり、これという定説はまだないようである⁵³。忌部正通は、ツヌクイとイクグイの別名としている⁵⁴。「居所の完成」と見る解釈が一般的らしい。しかし、この居所とは家などのような狭義の意味ではなく、もっと広く大地と天とすべて諸々の生命の宿り育つべき居所という意味での「居所の完成」ととりたい。その居所には天の門があり、その門を守るのが、オオトノジとオオトノベと考えることも可能なのではないだろうか。先に「創世記」4日目の「天の屋根（ラキハ）」はノアの洪水の「天の水門」と同じではないかと述べた。この門が開かれたとき、ノアの大洪水が起こったのであるならば、めったなことでは開かれることのないよう、守られていなければならない。これは、「門で守る神」の存在を暗示させる。この「天の水門」の番人が2柱の神であることは、門というものが通常2つの柱によって出来ていることと同時に、「神は大きな二つの明かりをつくられた」と対応しているように思えるのは、考えすぎであろうか。

いずれにせよ、一方はエロヒムにより、他方はムスヒにより、世界は整えられていったことが分かる。

4 人間の誕生

ここで、神は、こう仰せられた、「われらに似せて、われらにかたどって、人間をつくろう。そして、海の魚と、天の鳥と、家畜と、野の獣と、地をはうものすべてを、これにつかさどらせよ

う」と。

神はご自分にかたどって、人間をつくりだされた。

人間を神のかたどりとし、

男と女につくりだされた。

神は、人間を祝福して仰せられた、

「生めよ、ふえよ、地に満ちて、地を支配せよ。海の魚と、空の鳥と、（家畜と、）地をはう生き物をつかさどれ」。

また、神は仰せられた、「私は、地の表に生じて、種を实らせるすべての草と、種のある果実をつくるすべての木とを、おまえたちに与える。それが、おまえたちの糧となろう。そして、野の獣、空の鳥、地にあるそれらすべての生き物の糧として、青草を与える」。そして、そのようになった。神は、ご自分のつくりだされたすべてのものをながめわたされた。これをよしとして満足された。こうして、夕べとなり、朝となった。これが六日めである。（創世の書 1・26－31）

「われらに似せて、われらにかたどって、人間をつくろう」「ナアセー アダム ベツアルメーヌ キドゥムテーヌ」という部分は、直訳すると「我々は我々の似姿に、我々の像としてアダム（人間）をつくろう」と読める⁵⁵。アダムは最初の人間の男性の名だが、ここでは人間全体の総称として使われている。アダムは土（アダマー）からつくられたものである。アダム（人間）はその名が示すとおり、大地の塵からでき、人と神とには絶対的な隔たりがあり、被造物の卑小さをもっている。と同時に、神の像として「他の動物と異なり、『ペルソナ』をもつもの」として、その「偉大さは神の特別なたまものを受けたところからきている」とも解釈されている⁵⁶。しかし、これら人間の本質のなかに神の像、もしくは似姿として、神と同一視できる何らかの能力を求めることは、人間をすべてのものの尺度とした人間中心的な見方であり、『旧約聖書』の神の至高からまったくかけ離れているという⁵⁷。確かに「神の像」という人間の自尊心を満足させるこのような解釈は、中世以来、人間を自然の上におき、支配する構造を作り出してきて

いる。それは多分に人間中心的な世界の見方であるといえるだろう。人間が「神の像」であるとするならば、神の形は人間の姿であり、人間はただ存在することによってではなく、神を助ける為に何かをなすことによってのみ地上で神を表わしている、というギブソン氏の解釈には納得できる⁵⁸。すなわち、人間は神と違い完全ではないが、「神の像」となるべき十分なものが与えられ、「神の像」となるべく期待され続けていると考えられる。そして、それが見て「よし」とされ、「美しい」⁵⁹とされることなのではないだろうか。

さて、一方『古事記』では、世界と生命の誕生についてどのように記されているであろうか。

次に於母隴流の神。次に妹阿夜訶志古泥の神。

〈此の二はしらの神の名は皆音を以ゐる。〉次に伊耶那岐の神。次に妹伊耶那美の神。〈此の二はしらの神の名も亦音を以ゐること上の如し。〉上の件の、国の〔之〕常立の神自り〔以〕下、伊耶那美の神より〔以〕前は、并せて神代七代と稱ふ。〈上の二柱の獨神は、各々一代と云ふ。次に雙べる十はしらの神は各々二はしらの神を合わせて一代と云ふ〔也〕。〉（1 天地初発 53-55）

オモダル、アヤカシコネは「両神で一体の神で、オモダルは男神、カシコネは女神とされるが具体的な神徳は不明」としながらも、本居宣長はオモダルの字義について、「面の足と云うは、不足処なく具はりととのへるを云ふ、面を云ひて、手足其の余も皆凡て満足することはこもれる御名なり」とし、「体すべて整ったという意味」と解釈している⁶⁰。また、アヤカシコネは、「御面の足はせるを見て可畏む」ことを意味するものと捉えている⁶¹。「別に大地の表面あるいは国土が整った意味とする説、さらに対偶神の相互の賛美とする説もある」⁶²。あるいは、西宮一民氏の「男根女陰の神像」という説もあるようである⁶³。相見英咲氏も本居の説に近く、「オモダルは面足でよく、出来上がった家・建物が立派に整えられたことを、男神の容貌が整って美しいこととして表現したにすぎない。カシコネ（アヤカシコネ）は、カシコは惶

むの意。アヤは感動詞と見てよく、したがってアヤカシコネは、『ああ、かしこし』だ。カシコネは、つまり、立派な家・建物ができ——オモダル——で、そこに畏敬の念が行き渡る様子を述べたもの」と解釈している⁶⁴。ここでは、先述のオオトノジ・オオトノベ同様、狭義の「立派な家・建物ができ」たと考えるべきではなく、もっと広義の「立派な家・建物ができ」たと考えるべきであろう。すなわち、生まれ出でたすべてが、「立派に整えられた」——オモダル——のだと考えてもよいのではないだろうか。そして、それを受けて、生成させた世界への賛美とも、世界全体の創世の作業について、栄光と神聖さが広く行き渡ったことへの賛辞とも思える、「アヤ、カシコネ」という言葉「ロゴス」が「成った」のではないだろうか。「創世記」の次の言葉が、これに対応するように思えてならない。

神は、ご自分のつくりだされたすべてのものをながめわたされた。これをよしとして満足された。（創世の書 1・31）

聖書の神は、創造 1 日ごとに自ら創造したものを「よしと思われた」とし、満足しているが、特にこの最後の 6 日目の創造においては、「非常によい」「トヴメオッド」としている。『七十人訳ギリシア語聖書』ではもっと端的に「非常に美しかった」⁶⁵と訳されている。「立派に整えられた」——オモダル——世界に「非常によい」（トヴ メオッド）、あるいはまた「非常に美しかった」（アヤ、カシコネ）と満足したのである。そして創造主の栄光は、天地に満ちた。

さて、ついに神の御業の最後を飾るに相応しい被造物として人間が創造された。土（アダマ）からつくられたアダムとその妻エバである。しかし、「創世記」第 1 章には、まだそのような詳しいことは記されていない。第 2 章に人間の男アダムから女エバが創造されたことが、章をあらためて記されている。よって、ここでは簡単に、『古事記』でも最後にイザナギとイザナミという男女一組の人間の祖が誕生したということを述べるにとどめたい。

さて、クニトコタチからイザナミまでを「神世七代」という。すなわち、クニトコタチとトヨク

モスは1柱1代と数え、ウイジニからイザナミまでの10柱の神々は2柱で1代と数えるというわけである。あわせて「七代」、「創世記」天地創造の7日間と同じ数字が出てくる。この「7」という数字は、ノアの洪水や「黙示録」など『聖書』中さまざまなところに出てくる特別な意味を持つ数字である⁶⁶。いわば聖書的完全数として、非常によく出てくるだけでなく、正典外典を問わず、神の栄光や神罰などが語られる際に、効果的に使用されているように思われる。この「7」という数字を考える時、この数字は、また数学的にも特別な「素数」である事に気づかされる。また、この数字は生命に非常に関連の深い数字であることにも気づく。女性の月経は大体28日前後であり、その妊娠周期が十月十日といわれるように大体280週(7×40)であることはよく知られている。身近な動物である犬や猫などは63日(7×9)、ネズミなども、ハツカネズミなどといわれるが如く21日(7×3)である。鶏などの鳥は大体21日で孵化するというし、アヒルは28日(7×4)、スズメなどは14(7×2)日前後だという。環境や個体によって多少誤差は出るものではあろうが、大体生命誕生の周期は聖書的完全数「7」の倍数に非常に近い。これは、『古事記』の神のムスヒの力とも対応するものと思われる。ムスヒの力とは生成の力であるから、当然生命の生成に関わっているものと考えてしかるべきである。神の創造とムスヒの力、表現の違いこそあれ、両者は宇宙生命の誕生、生成を表していると考えられる。

ムスヒといえば、造化三神のアメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カミムスヒの神々は、宇宙の中心、あるいは主(アドナイ)とムスヒの力を暗示するだけで、早々に「身を隠しき」となったが、この「3」という数字も数学的特別数、素数である。また、『新約聖書』における「聖三位一体」を考えれば分かるように、この数字も聖書的に非常に意味深い数字、神の本性を表す数字であることが分かる。これに、ウマシアシカビヒコヂとアメノトコタチ2柱を足して、合計5柱で「別天つ神」というが、2も5も素数である。

素数ではないが、この「別天つ神」5柱と先のクニノトコタチからイザナミまでの「神世七代」をあわ

せると、12代となる。また、「神世七代」だけを見ても、その神の数は12柱である。一方、『聖書』の神の創造は、正確にいうと、6日の創造と安息日の起源ともなっている1日の休息からなっている。この創造の6日間を2倍すると12であるが、この数字も、イスラエル12支族などというように聖書的に重要な数字であると思われる。12と6というと、現在も時間を計る場合に使用されている12進法と60進法を思い起こさせる。どちらも時間を計り、また円や球体にも関係している。こうして宇宙は秩序「コスモス」をもって出来上がり、時を刻み、循環を始めたということを暗に示唆しているようにさえ思え、神の創造とは、実に神秘的で人智を超えたものであると感得させる。「創世記」も『古事記』も、こうしてみると同じ神秘性を持って、その創世の物語を語っているといってもよいのではないだろうか。

さて、以上のように世界と生命を創造、あるいは創世した「神」とはどのような存在なのであろうか。

「創世記」では、神は「エロヒム」と複数形である。人間の創造にあたっては、「われらはつくろう」「ナアセー」と一人称複数形になっているが、これには諸説ある。すなわち、①神が天使に呼びかけた、②大地に呼びかけた、③神の尊厳を表わす複数形、神が自分に呼びかけた、④神と人間の共同作業などである⁶⁷。昔の教父も現代の学者も、「聖三位一体」が初めてここに暗示されていると解釈しているようである⁶⁸。「聖三位一体」を表わしているということについては賛否あるが、神の本性とは本来このようなものなのかもしれない。万物は神と分かちがたく一つであり、神なくしてはこの時空に何一つとして存在しえない。神はすべてを超えて偉大な存在であり、それを我々がそのまま認識することが出来ない程に、大きく絶対的な存在とされている。神ならぬ身が神を認識しうる手段としては、ただその影ともいふべき被造物から推測するしかない。また、『聖書』では擬人化された姿としての描写も極力避けられていることから、より我々に分かりやすい形の人格神として捉えることもできない。このようなことから考えると、神とは「隠れた神」であり、「見えない神」である。唯、その霊(息吹)が混沌「カオス」に漂

い、かき乱し、秩序「コスモス」を生み出す、創造の力に満ちている。神はカオスと虚無を終わらせ、時間さえ生み出していることから、始まりであり、創造の源であり、また終わりでもある。そして、唯一でもあり、すべてでもあると考えられる。

さて、本居は「迦微と申す名ノ義（こころ）は未だ思ヒ得ず」といい、『古事記』などに登場する神々を帰納的に説明している⁶⁹。

さて凡そ迦微とは、古御典等（みふみども）に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐ス御霊をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獣本草のたぐひ海山など、其（ほか）何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。⁷⁰

神道の「神」も「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物」として、やはりすべてを超えて偉大な存在であり、それを我々がそのまま認識することさえ出来ない程に、大きく絶対的な「徳」のある存在と考えられているようである。新井白石も「神は上なり」⁷¹といい、人より絶対的に上位に位置する存在と考えていたようである。そして、その「神」とは「鳥獣本草のたぐひ海山など、其（ほか）」、「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物」であるならば、「何にまれ」万物が「神」として崇敬されるべき存在になるのである。日本の「神」は「鳥獣本草のたぐひ海山など」、自然界の形あるものすべてが崇敬の対象とされているように思われがちであり、アニミズムの産物ように言われているが、それは本来的には少し違っているように思える。なぜなら、本居によると、あくまでも「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物」が「神」なのであるからである。実は、「神」に形はないのである。それは、形あるようでいて形のない、「見えない神」「隠れた神」なのである。敢えて言うならば、この創世の場面における「神」とは、ムスヒ、生成の力、生命力に溢れた、生まれ出ようとする生命の力、もっといえば「生」そのものの、存在の力そのもののようにも感じられる。そのムスヒの霊は混沌「カオス」に漂い、そこから秩序「コ

スモス」を生成する創造の力に満ちている。その意味では、「神」はカオスでもあり、コスモスでもあるといえる。また、「身を隠しき」の「隠れる」という言葉は古来「死」を暗示させる言葉である。何かが終わって、そしてそこから何かが始まる、あるいは生まれるという生命の循環を暗示しているのかもしれない。その意味で、「神」とは万物生成の始まりであり、創造の源であり、また終わりでもあるともいえるのではないだろうか。

エピローグ

以上、『聖書』と『古事記』の創世の世界観からそれぞれの神の観念を比較してみると、意外にも思えるが、その神観念には共通の要素が見られるように思われる。創世の前に何かがあったか、なかったかの根本的な違いは否めないが、それも「無」の観念の相違によるとする解釈も可能であるといえる。もし、そのように考えてもよいならば、両者の神観念には、非常に興味深い相似が見えてくるように思われる。

¹ 神野志隆光・山口佳紀『古事記注解 2』、笠間書院、1993 年による。

² フェデリコ・バルバロ訳『聖書』、講談社、1986 年、p.6。

³ 同上、p.5。以後「創世記」からの引用はすべてフェデリコ・バルバロ訳『聖書』「創世の書」に依る。ただし、本文中では、「創世の書」の引用箇所を明記している場合を除き、「創世の書」を「創世記」と記す。

⁴ 同上、p.6。

⁵ 山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註釈（1）創世記』、ATD・NTD 聖書注解刊行会、1993 年、p.63。

⁶ フェデリコ・バルバロ訳『聖書』、p.6。

⁷ 片柳栄一訳『アウグスティヌス著作集第 16 巻』、教文館、1994 年、p.19。

⁸ フェデリコ・バルバロ、同上、p.6。

⁹ 山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註釈（1）創世記』、p.63。

¹⁰ フェデリコ・バルバロ、同上、p.6。

¹¹ 山我哲雄、同上、p.64。

¹² 同上。

¹³ 同上。

- 14 フェデリコ・バルバロ、同上、p.136。
- 15 同上。
- 16 片柳栄一訳『アウグスティヌス著作集第16巻』、p.59。
- 17 神野志隆光・山口佳紀『古事記注解2』、p.9。以後「古事記」からの引用はすべて神野志隆光・山口佳紀『古事記注解2』「天地初発」に依る。
- 18 國學院大學日本文化研究所『収縮版 神道事典』、p.367。
- 19 同上。
- 20 同上。
- 21 同上。
- 22 同上、p.385。
- 23 神野志隆光・山口佳紀『古事記注解2』、p.50。
- 24 西郷信綱『古事記注釈 第1巻』、平凡社、1984年、p.95。
- 25 神野志隆光・山口佳紀、同上、pp.12-24。
- 26 國學院大學日本文化研究所、同上、p.49。
- 27 同上、p.65。
- 28 同上、p.395。
- 29 同上。
- 30 神野志隆光・山口佳紀、同上、p.13。
- 31 同上、p.39。
- 32 同上。
- 33 同上、p.41。
- 34 同上。
- 35 同上、pp.42-43。
- 36 國學院大學日本文化研究所、『収縮版 神道事典』、p.367。
- 37 小坂國繼『西田哲学と宗教』、大東出版社、1994年、p.201。
- 38 フェデリコ・バルバロ、同上、p.6。
- 39 國學院大學日本文化研究所、同上、p.61。
- 40 神野志隆光・山口佳紀、同上、p.44。
- 41 上田賢治『記紀神話の神学』、大明堂、2002年、p.24。
- 42 同上。
- 43 同上、p.28。
- 44 同上、p.27。
- 45 國學院大學日本文化研究所、同上、p.53。
- 46 フェデリコ・バルバロ、同上、p.6。
- 47 同上、p.17。
- 48 ミルトス・ヘブライ文化研究所『創世記I』、ミルトス、1998年、p.18。
- 49 同上。
- 50 神野志隆光・山口佳紀、同上、p.49。
- 51 國學院大學日本文化研究所、同上、p.50。
- 52 同上。
- 53 同上、p.56。
- 54 同上、p.50。
- 55 ミルトス・ヘブライ文化研究所『創世記I』、p.20。
- 56 バルバロ、同上、p.6。
- 57 ギブソン『創世記I』、p.136。
- 58 同上、p.140。
- 59 秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書』、河出書房新社、2002年、による。
- 60 國學院大學日本文化研究所、同上、p.59。
- 61 神野志隆光・山口佳紀、同上、p.50。
- 62 國學院大學日本文化研究所、同上、p.59。
- 63 相見英咲『倭国神話の謎』、講談社、2005年、p.52。
- 64 同上。
- 65 秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書』、p.24。
- 66 以下の数字に関する記述内容については部分的に大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年、p.208-209に依拠している。
- 67 ミルトス・ヘブライ文化研究所、同上、p.20。
- 68 フェデリコ・バルバロ、同上、p.6。
- 69 子安宣邦『平田篤胤の世界』、ペリかん社、2001年、p.89。
- 70 同上。
- 71 同上、p.90。